茨城キリスト教大学紀要第35号　23
社会・自然科学　p.23～35

檀一雄の病跡学的研究

―躁的防衛，抑うつポジション，移行対象の視点から―

真　鍋　守　栄

はじめに

檀一雄は，太宰治，坂口安吾と親交があり，彼らなどとともに無頼派，破滅型の作家といわれる。無頼派といわれる作家たちは幼い頃の家庭環境に問題を持つ人が多く，それが後年の彼らの生き方に強い影響を与えたと思われる。心理学，精神分析学の分野では幼少期の環境が人格形成に与える影響が重視されている。無頼派といわれる作家たちの中で，檀一雄の放埒には，一見破滅に向かうと見える行動の背景に，バイタリティーや生への意志が感じられる。檀一雄を素材として，幼少期の家庭環境の負の部分を人はどう受けとめて生きるのか，そこに作家という条件が加わるが，病跡学的な事例研究を試みたい。

Ⅰ　生活史[1)]

a）乳幼児期……檀一雄は，明治45年（1912年）2月3日，父参郎（当時31才）母トミ（19才）の第一子長男として，山梨県南都留郡谷村町（現在の都留市）に生まれる。弟1人，妹3人がいる。本籍は福岡県山門群沖端村（現在の柳川市）で，蔵前工業高校（現在の東京工業大学）出身の父が同地の工業試験所に勤務していたため，山梨で生まれる。その後，父の転任などのために，柳川，久留米，東京（谷中），福岡，足利，などを転々とした。大正5年（1916年）満3才から4才になる年，1月に東京谷中で飛行船「雄飛号」を見る。2月に妹美保出生。大正6年（5才）妹寿美出生。

b）児童期……大正7年（6才）4月，父が青森県弘前工業学校の教師として赴任したため両親は青森に転居したが，一雄のみ母方の実家に預けられ，国分（現在の久留米市）男子尋常小学校に入学。大正8年（7才）9月，父の転任先の足利市の尋常高等小学校に転校し，両親と暮らす。市内の借家から翌9年（8才）3月に，長林寺という山寺の離れに転居する。このころ，母の初婚への疑惑から両親の不和が表面化し，5月，母は実父の葬儀のため帰郷した際，夫と別居するつもりで一雄を国分男子尋常高等小学校に転校させた。8月，妹久美出生。大正10年（9才）1月，参郎が病気のため母が別居を解消し足利に戻ったため，再び足利尋常高等小学校に転校。9月，母が久美のみを連れて家を出る。翌11年（10才）8月に，母は久美も実家に残し，医科大学生を頼って上京した。

c）思春期・青年期……大正13年（12才）4月，足利中学校入学。この年母トミが貿易商高岩勘次郎と再婚した。昭和3年（16才）3月，4年修了で足利中学を卒業し，4月福岡高等学校文科乙類に入学。「玄海」という同人雑誌を創刊し，詩や劇を発表した。また，母が住んでいる福岡市の場所を知り，その姿を裏山から遠望した。なお，高校入学と同時に飲酒を覚えた。昭和4年（17才）同盟休校の首謀者の一人として，一週間の停学処

分を受ける。昭和5年（18才）3月，マルキシズム研究の学内グループが摘発され，檀も一年間の停学処分を受ける。ニーチェ，ショーペンハウエル，佐藤春夫，瀧井孝作，小林秀雄，横光利一などを耽読。昭和6年（19才）校友会雑誌に小説「或家乃の断層」などを寄稿し，一等入選した。昭和7年（20才）東京帝国大学経済学部入学。授業にはあまり出ず，福岡高校以来の友人たちとボヘミアン的？共同生活を営み，本郷界隈で10銭ウイスキーなどをしきりに飲んでいた。昭和8年（21才）夏頃，母と東京で再会する。11月「新人」に実質的なデビュー作となる「此の家の性格」を発表。同作を絶賛した文芸評論家古谷綱武を介して，尾崎一雄，太宰治などと知り合う。12月には佐藤春夫を紹介され，終生の弟子となる。昭和9年（22才）「青い花」創刊。同人は太宰治，中原中也，森敦など。また，坂口安吾と知り合う。昭和10年（23才）留年する。「青い花」は「日本浪漫派」に合流し，そこに「花筐序」「夕張胡亭塾景観」を発表し，後者は第二回芥川賞候補作となった。

d）若い成人期……昭和11年（24才）東京帝国大学を卒業するが定職に就かず，5月「花筐」を「文芸春秋」に発表。8月，満鉄への就職依頼という理由で，渡満し，各地を旅行し，年内に帰国。昭和12年（25才）日支事変が起こり昭和15年（28才）12月まで召集された。召集解除後満州へ渡る。友人の世話で，長春，寛城子に暮らす。ヤブロニーで養蜂をする計画などあったが実現せず，昭和16年（29才）10月帰国。12月，母トミの世話で，高橋律子と福岡で見合い，その後渡満し，再び寛城子に暮らす。昭和17年（30才）春，帰国し，5月高橋律子と結婚，東京都に住む。昭和18年（31才）8月長男太郎出生。「母の手」を「知性」に発表。昭和19年（32才）5月「天明」を「現代」に発表，野間文芸奨励賞を受ける。7月，報道班員として，中国へ従軍する。従軍延長を願い出て，翌昭和20年（33才）5月に帰国。妻律子は，結核で病臥していた。10月律子と太郎の三人で，福岡県糸島郡北崎村（現在の福岡市）に転居。昭和21年（34才）4月，律子死去。福岡県柳川で葬儀をすませ，11月山田ヨソ子と再婚する。

e）成人期……昭和22年（35才）1月，福岡市に転居。劇団「珊瑚座」を設立。後に『火宅の人』のヒロインとなる，女優志望の入江久恵と知り合う。昭和23年（36才）2月「リツ子」の連作の「終わりの火」を発表。上京して文筆で生活を支える決意を固め，10月，練馬区南田中に転居。昭和23年から26年にかけて，「リツ子」ものの他に中期を代表する短編のほとんどを書き，「長恨歌」「新説石川五右衛門」により昭和26年（39才）直木賞を受賞する。25年，次男次郎出生。26年10月から27年4月にかけて南氷洋に出かけ，「ペンギン記」を発表。このころ，入江久恵への強い恋情を自覚し始める。29年長女ふみ（後に女優となる）出生。30年2月，坂口安吾死去。8月，次郎日本脳炎に感染。

f）中年期……昭和31年（44才）3月，次女さと出生。8月入江久恵と事をおこし，家を出る。32年久恵と台東区浅草千束町へ転居。33年久恵との生活のために豊島区池袋と千代田区麹町にアパートを借りる。10月から翌34年4月まで，アジア財団の招待により，アメリカからヨーロッパにかけて旅行。その間，久恵への嫉妬と疑惑にさいなまされながら，数人の女性と酒色にふける。35年久恵とつかみあいの喧嘩を演じた頃から二人の関係は冷えていった。38年（51才）入江久恵とのことを中心にした『火宅の人』連作に没頭。全体の三分の一をこの年に執筆。39年5月，生涯の師であった佐藤春夫死去。11月

次郎死去。44年（57才）「黄なる涙」「わが祭り」（『火宅の人』）を発表。45年（58才）11月から47年2月まで，ポルトガルなどヨーロッパへ旅行。49年体調不良がつづき，7月，博多湾に浮かぶ能古島に家を買って移住する。島からは，青年期を過ごし，若い成年期にリツ子を看取った福岡市が対岸に望める。山頂から，檀の生涯のほとんど全部の出来事が，指さしながら点検できる場所である。50年7月，肺の悪性腫瘍と分かる。8月，『火宅の人』最終章の口述筆記始まる。11月『火宅の人』刊行。51年1月2日死去。享年63才。

Ⅱ　檀一雄の生い立ちとパーソナリティの特徴

1）幼少年期環境の特殊性……Ⅰの生活史にあるように，檀一雄の幼少年期は，父の転任，転職のために，転居，転校がきわめて多く，6～8才の頃は両親と別れて暮らすこともあった。9才からは，父との不和のため母が家を出たことにより，執拗に妻への恨みごとを聞かせる父と足利での生活になる。夏冬の休み毎に，福岡県柳川の父方祖父の家に預けられ，遠距離の移動を繰り返した。母は家を出て以来戻らなかった。

2）バイタリティの強さ……中年になっても，酒宴の最中に突然海で泳ぎたくなり，他の人を放っておいて出かけ，二時間ほどしてずぶぬれで帰ってきて，「さあ，これから呑み直しだ」と盃を持ち直すほど，身体的にも，精神的にも活力が旺盛だった。

3）放浪癖……Ⅰの生活史にあるように，国の内外，期間の長短を問わず，思いつくとすぐに旅立ち，家に定住することが一生を通じて少なかった。たとえば次のように：昭和15年12月の召集解除後満州に渡り，長春，寛城子などを転じる。16年10月帰国し高橋律子と見合い，その後渡満し，寛城子に暮らす。17年春に帰国し，5月高橋律子と結婚。19年7月，中国に報道班員として従軍するが，自ら延長を願い出て，20年5月に帰国。

4）女性遍歴……高橋律子が結核で亡くなって間もなく山田ヨソ子と再婚する。その後，ヨソ子と離婚はしないが，入江久恵と同棲するほかに，放浪的旅先などで何人もの女性と交わりを持った。

5）アルコール依存……青年期に酒を覚える。次男の次郎が日本脳炎で隔離，入院したのを見舞った「その足で酒場から酒場を飲み歩く」といったように，毎日の生活に酒は欠かすことのできないものだった。

6）料理することのへの情熱……「檀流クッキング」を連載するほど，自分で料理することに強い思い入れがあった。

このような特徴に注目しながら，以下で檀一雄の生涯について，理解を深めたい。

Ⅲ　「火宅の人」 檀一雄の人と文学

檀一雄の64年の生涯は，一生を通しての活力の強さ，放浪癖，女性遍歴，アルコール依存，食べること料理することへの情熱，によって特徴づけられる。檀はそれらの体験を素材にして，『火宅の人』などの小説を創りだした。米倉[2)]，福島[3)]などの病跡学の研究では，アルコール依存症，幼児期体験の反復強迫，母・女性イメージの歪み，などの精神力動の視点から彼の特徴を理解しようとしてる。幼少期の生活体験によって形成された無意識的な心のありようが，彼の生の方向を決定したととらえる。一方，文学の研究は，意識

的な決意を重く見ようとする傾向があるといえるだろう。たとえば長野秀樹[4]は，檀が4才になる年に見た，東京の空を飛ぶ飛行船「雄飛号」に感じた思いとつなげて，檀の心のあり方を次のように述べている。……「私たちがそこへ棲まなければならない卑小な人間の限界と，その限界を超えて，荘厳にうちひろがる悠久の空への畏怖の心」「悠久の空」への希望を語ると同時に，みじめではあるが「生きていることの美しさ」「生きる喜びというもの」を確立したいと願う，檀一雄の主人公たちの言葉は，改めて読み返されるに違いない。……遙かな理想を目指しながらそこへの運動の過程として足下の現実も踏まえようとする，そのような檀の志を中心において，彼の生涯を理解しようとしている。しかし，人間の生き方は，作家としての志も含めて，無意識と意識のからみの中で方向づけられるのではなかろうか。とくに，才能を示した芸術家の場合は。本論では，幼少期体験による無意識の力と意識的な志という二つの心のありようを視野に入れ，檀の生涯の理解を試みたい。主な切り口は，対象喪失による悲哀に対する躁的防衛，抑うつポジション，移行対象という精神分析の視点である。

A 葉子との旅……「黄なる涙」「わが祭り」にみる，檀一雄の生のありよう……

先に述べた檀一雄の生き方の特徴……病跡学では幼児期体験の反復強迫などとして理解され，文学論では，たとえば，「天然の旅情」に発する私小説的体験をもう一つの目で離れて見ることで，ロマンに書き上げる意志[5]として評価されるもの……は『火宅の人』の最後に近い章「黄なる涙」と「わが祭り」の葉子との顛末に集約的に表現されている。『リツ子・その愛』『リツ子・その死』『火宅の人』などの作品に見るように，檀の実人生と創作は密接に関連している。『火宅の人』は，妻子のある檀がヒロインの入江久恵とことを起こした翌年の昭和32年に，久恵について触れた最初の部分が書かれ，完成したのは檀の死ぬ4ヶ月ほど前の昭和50年であり，長い中断期間も含め20年近くかけた長編小説である。檀の実際の体験を素材とし，私小説の形をとりながらそれを越えたロマンの表現を志した，檀の代表作といえる。「黄なる涙」と「わが祭り」は昭和44年（57才）に書かれ，同棲までした入江久恵との仲が冷えはじめ（檀の安定に安んじ得ない性癖，何回目かの中絶，そして久恵の過去の男性関係への疑惑からの取っ組み合いの喧嘩を切っ掛けとして），愛人の元へも妻子の元へも寄りつきにくくなっていた，檀48，9才の頃の出来事が書かれている。『火宅の人』のヒロインは入江久恵であるが，愛人の元にも定着できず放浪的旅を繰り返す檀と，旅情と性愛をその時々に分かちもった女性は何人も登場する。その中でも，檀の性向をもつ女性版コピーと思われる26才の葉子との道行きは，『火宅の人』に描かれる繰り返される女性との祝祭の最後を飾るものとして書かれている。そして，愛人の久恵との最終的な別れを描く章と日本脳炎を発病して9年になる次郎の死を語る章の二つを挟み，檀の死の直前に口述筆記で書かれた終章「キリギリス」につながっていく。「黄なる涙」と「わが祭り」から檀一雄の特徴を具体的に見ていきたい。

（イ）自ら食すること。……一人だけの「祝祭」……

檀は突然思い立った，三，四日の旅行に，かつて愛人の久恵とことを起こしたときに二人で駆け込んだことのある，奥湯河原のなじみの旅館に葉子を連れて行く。葉子は旅行か

ら戻り，自分の働くバー（檀の先輩作家の未亡人がママ）にたくさんの土産を持って立ち去る。無断欠勤のための首を気にしながら。一人になった檀は「アテなしの，自分の夕暮れを目の前にしながら，浮き足たった身と心を，いったいどこに運び去ったらよいものか，今更のように途方にくれる」。そこで「自分一人でする豪勢な手料理をつくりあげる」ことを思いつき，すこし前まで久恵と暮らしていた目白のアパートに行く。二人の名前が書かれ，相合い傘のいたずらをされた表札ははぎ取られていて，そこに久恵の意志表示を見て檀は淋しさを感じる。しかし感傷は一人だけの祝祭の準備の前にすぐに姿を消す。彼は自分用に揃えてあった多種たくさんの料理用器具を整え，買い込んできた素材で祝祭の準備を始める。作業の合間に葡萄酒を飲み，彼は思う。

何はともあれ，生きると云うことは愉快である。或いは，愉快に生き抜くと云うこと以外に，格別な人間の道はなさそうだ。かりにそれが惑いであれ，槿花一朝の夢であれ，徒労の人生ほど，私にとって愉快なものはない。花は咲いて，しぼんで，また咲くのである。花はもとの花ではないかもしれないが，それでも，花は，それぞれに，精一杯に咲くではないか。

彼はいそがしく料理に精を出す。

やがて，牛の舌がグツグツと気泡をあげながら，獣類特有の甘い匂いをあげはじめるから，あわてて中華鍋を持ち出して，ニンニク，玉葱，人参，ピーマン，トマト，セロリを，バカ丁寧にバタでいため合わせ，ルリ葉，クローブ，タイム，パセリの芯，エストラゴンの葉を放り込んで，そろそろ頃合いになってきた牛舌のブイヨンを，静かに注ぎ入れるのである。（略）ほかに，誰一人いない部屋の中で，牡蠣は冷蔵庫の氷を敷きつめながら，森閑と大皿に盛り上げる。アンディブと人参のサラダが，金色の皿の上に目にしみるほどさえている。これこそ，私一人でする大饗宴である。

この大饗宴は，9才の時母が家を出てから，父，弟妹と暮らす一雄が食事の支度をしたことの延長上にあると思われる。母という依存対象を失って悲しむよりも，檀少年は人に頼らずに苦境を越えるために自ら動いた。この辺の関連は57才の檀によって語られている。

ひょっとすると，この私は，少年の時以来，自分一人でする煮炊きと飲食（おんじき）に，あまりに深く馴れ過ぎてしまったのではないか。そうだ。十歳になるかならぬ頃，母が家出をしてしまってからと云うものは，自分の食べるものは，自分で見つくろい，自分で煮て，自分で喰う……，この永い習性が，私を特定の女性との持続的な親愛から，もぎはなしてしまうのかもわからない。私にとって，或時代の思い出と云えば，この地上のどこかで，たった一人，さまざまに煮炊きをし，たった一人で飲み，たった一人で喰ってきた秘密な歴史のようなものではないか。この異様な，自分一人でする飲食の歴史が，いつも，私を，なにとはなしに家庭的な団欒や雰囲気からはじき出してしまうのかも分からない。家庭の側からではない。自分自身の側からである。云ってみれば，自分一人の飲食を求めて，アテなしの放浪を繰り返すのでもあろう。

檀は，一人で食べるだけでなく，親しい人に自分の料理を振る舞うことも，ともに飲むことも好んでいる。しかし，この場面にあるように，異性との行き当たりばったりの旅という祝祭が終わり，成り行き上一人になったときに，或いは日常性のしがらみから逃げ出

した結果として，自ら一人になったときに，孤独をどこかで感じながらも，自分だけの祝祭を準備する。酒を覚えた青年期以降は，アルコールによる酩酊も加わり，祝祭は完成される。これは，対象から分離して一人になったとき，淋しさが入り込むことに対する躁的防衛[6]といえる。また，対象喪失の危険がある二者関係の世界から，それがない口唇期の一者関係の世界への防衛的退行ともいえる。次のBでふれるが，幼少期の対象喪失体験への檀の意志的な対応（防衛ともいえる）が，中年期の生き方にも持続されているといえるようだ。

（ロ）対象（異性）との天然の旅情的関係……葉子との二人の「祝祭」……

檀との無断欠勤の旅のせいで，葉子はバーを首になる。檀との「大脱線」の証拠の土産をわざわざ，ママや仲間に持っていってばれるようなことをするのが葉子らしいところで，「馘よ！ アタシ，馘！」とベロを出す彼女に，檀は「あとあとことみ上げてくるおかしさがとまらなかった」。依頼された本を書くための取材に九州に行くつもりだった檀は，首のお詫びがてら，「アタシもついてゆきたいな」という葉子を同行することになった。九州行きの飛行機，ムーンライト便に乗ると葉子は，「取ってよ，取ってよ」と綾取りを始め，檀が下手なため「しょうことなく」，「千変万化，まるで手品のように，左右の指の間から，さまざまの綾を，ひきしぼったり，ほぐしたり」一人遊びを始める。板付の飛行場に早朝つき，時間調整のために，葉子の案内で波止場の船待ち用の食堂に行く。たまたま一時間後に，葉子の生家のある小値賀島に行く船があるのを知り，檀は一緒に島に行くことにする。そこで久しぶりに両親に会う葉子に連れられて，「トク子（小説中の本名）が，えろう，お世話様になりまして……」と母親に出迎えられる。義父に産まされた子供を家の納屋で死産したことが葉子から語られる。家に行く途中のことだが，タクシーの運転手を短時間遠ざけるために檀が言った嘘から，劇団にいたという葉子はその嘘に乗っかり，「はじめから，そのつもりででもあったように，委細構いなく，スェーターを脱ぎ，スカートを脱ぎ，シュミーズを脱ぎ」海を背景にして裸の跳躍をはじめる葉子の「あやしい肢態に向かって，さかんな拍手を送りつづける」檀だった。

葉子との旅は九州をあてもなくさまよい，三，四ヶ月もつづく。

> 私達は，一体，何を信じ合っていたと云うのだろう。（略）ただ，手と手をつなぎ合って，バスが来ればバスに乗り，汽車が来れば汽車に乗り，（略）日が暮れれば，辺りを見廻し，どこの宿にでもしけこんで，お互いにわけもなく，うなずき笑うだけであった。（略）
>
> せいぜい，四，五日の旅を一緒にしたら，彼女を東京に帰すつもりでいたのに，どう云うわけか，旅の進行につれて，私はお葉なしでは，自分の前進の頼りを失うような，おかしな気持になった。不思議である。自分でも納得のできない感情だ。
>
> もっとも，私の旅そのものが，はじめから，何のアテも，どんな計画も，ないのであって，ただ，私とお葉の，危うい均衡が……，或は逸脱者としての，寄る辺のない連帯感が……，方途もない横すべりの運動をおしひろげていったものに違いない。恋愛にしては不安定に過ぎる，一組の男女の肉と魂が，日頃は満たされる筈のないお互いの安定と寛容を，この旅の中にだけ，めざましく，持ちより，賭けていったのかも

知れぬ。

まわりくどいとならば，私のアテなしの旅に，彼女ほど似つかわしい，アテなしの女性はいなかったのでもあろう。彼女とうろつくだけで，彼女は私の心の周辺に，何の屈託もないめざましい光彩を添えてくれる。アテなしの……，融通無碍の……，夢まぼろしの……，人間の生滅の……，はかない正覚を得るような心地がされるのである。

葉子は生家のある島を，檀にくっつくようにして脱出したとたん，「奔放になり，自在になり，止めどない機知を得て，手の舞い足の踏むところを知らない有様」になった。大江健三郎[7]が『火宅の人』の檀をトリックスターと評しているが，この旅の葉子こそそういえるだろう。たとえば，波のしぶきで彼女のスェーターとスラックスがずぶ濡れになったとき，店先にぶら下がっていた色の褪めたネルのネグリジェを買い，裾を鋏で切り，膝上二十センチの「土人服」をしつらえて着用した。膝頭までの黄色い毛糸のストッキング，赤い登山帽で汀に向かって走り出していくと，「一個の妖精が立つかと疑われる」のだった。ほめられて調子に乗り，一枚700円の緑のマントを買って「土人服」の上に着込んだ。二人の外見のために，宿の主人に旅回りの夫婦漫才と思いこまれたり，運転手にタクシー強盗と間違えられ，田舎の駐在に尋問されたりする。壇と二人して，道化のような葉子であるが，元日に，横なぐりの雨と吹きつける砂の吹上浜の松林で，「落松葉の色が，雨濡れの模様に，綺麗な円陣を描いている」のを見て，「綺麗……，ほんとに綺麗よ……」という葉子に，「唇の色を失ったそのお葉の連呼する声と，唇を，この時ほど，いじらしく美しいものに思ったことはない。」と檀は心を動かしている。

このような旅にも終わりは来る。檀はそのころよく出かけて行ったBホテルに葉子を連れて行く。従業員も客も少ない森の中のその宿には，瀬野セイという従業員がいた。午前2時でも3時でもベルを押して注文する檀に，「ネグリジェ姿のまま長い廊下を渡ってきて」自分が作ったサラダとともにビールを持ってきてくれる。そのような「人柄そのものの好意や親切を，えてして男は身勝手に，相手の求愛の言葉だとはきちがえるが」と，檀は彼女と一夜を共にしたのだった。「相手の信頼と好意がはじまろうとする時に，きまって，その転覆をはかる奇癖」を持つと自覚するが，「足が前のめり」に駆けこんでしまう檀は，そのBホテルに，葉子を連れて行った。セイが部屋に二人を出迎え，三人のやりとりがある中で，「コラッ！　お前達，出来てるな！」と葉子が突然叱咤する。「なんかって，こら，セイさん。この先生は，ウチのダンナですからね，指一本だって触れさせないぞ。見てろよ，陰でコソコソしてるとこでも見付けたら，たちまち，ピストルをぶっ放すからね（略）」と凄む。檀はびっくりし，セイは泣き出しそうになるが，葉子は今度は腹をかかえて笑い出し，「この先生ったらさ。いつ，どこにほったらかされるか，知れたもんじゃないわ。こんな旦那ってあるもんか。……それでもう，つくづく愛想がつきちゃったからさ，明日の夜汽車で，東京に帰るつもりなのよ。バイバイよ。さよならなのよ。あとは，そっくり，セイさんにおまかせしますからね。よろしくね。だから今晩は一緒に，ジャンジャン飲んじゃいましょう。ほんとよ。（略）」と三人で飲み会が始まる。葉子の言葉は，「さんざん思いつめた挙句」のものであり，「オレは，だって，帰る家がないよ」という檀に，「気が向いたら折り返してくるわ」と，葉子は「まったく，あっけなく」東京へ引揚

げてしまった。

死の直前まで書かれた『火宅の人』の中で何度も繰り返される女性との祝祭は，葉子とが最後になっている。残りの檀の人生は，祭りの後なのだろうか？　その後も東京で，葉子の「アパートに忍び込んだり，細君から電話で知らされる仕事だけを忙しくやってのけて，あとは，行き当りばったりの酒場を流してまわる」生活である。葉子は「アテなし」の檀に見切りをつけ，合い鍵を檀に預けていたアパートから越して，アテに出来る相手との暮らしを求めていくことになる。

檀は葉子との九州の旅の後に，己の愛について語る。20年近くに渡って書かれた『火宅の人』のなかで，何人かの女性との交情の様子とともに，愛についての思いが何回か述べられている。これは，57才の檀が語る，女性との最後の祝祭の後の思いである。

> もし，愛などと云うものがあるとすれば，平穏の，悲しい技巧で，瞬時を慰め合うだけのことだろう。いや，その時間を，いささか，もちこたえやすいように，管理し，維持するワザクレのことでもあるか。
>
> 私が辛うじて憩うのは,いつも,愛の思惑を捨てた女性達の膝のもとであった。菅野もと子,実吉徳子（葉子),瀬野セイ等,わざわざ数えたててゆかなくとも,彼女らの色情の透明さばかりが，私を他愛なくなごませ，はげましてくれたようなものだ。(略)
>
> 或はまた，物心ついてから，平穏な母の愛や，母の庇護下に置かれたことがなかったから，一切の母性的な女性の愛情や，平穏な女性の庇護を，わずらわしく，面倒な災禍のように，おそれ，臆するのでもあろうか。
>
> 私は，いつも彼女らから逸脱して，自分の指顧できる明瞭なおのれの祝祭の中にばかり生きつづけてきたことを自覚するのである。その淋しさがどうであれ，その淋しさの中にだけ，湧き立つような生甲斐を見出してきたものだ。

この表現にあるように，『火宅の人』の檀は，同じタイプの女性たちと同じことを繰り返し，そして，ほぼ同じ愛への思いを語っている。この点において，檀の変化や成長は見られない。唯一関係が持続した愛人の入江久恵も，檀と交渉を持ち始めた頃は，冷静で良妻賢母タイプと見える妻と対比され，葉子のように，天然の旅情に身を任せて，放浪の旅をともにできる女性として描かれている。しかし，久恵との関係が持続したために，檀にとって彼女は，おそらく彼の幼年期にその基盤を持つと思われる女性イメージと重なり，「生活というものが，彼女らの牧歌を撲殺」[8] し，「(略) 頑冥と，貪婪と放胆さを持って，どんな陰謀だってやらかしかねない」存在に近ずかざるを得なかった。また，檀との関係の前に久恵はある右翼の大物の女だったという噂を聞いて，子分に仕返しを受けるのではという被害妄想的な不安と嫉妬を，檀は感じることになる。愛という名のもとの女性との持続的関係は，檀にとって危険なものなのだ。檀にとって，安心と満足を与えてくれる女性との関係は，縛られないものである必要がある。生活を共にすることは,「お互いに余程の忍耐と，痛苦をもちこたえねばならない」ことで，檀はそれから逃げようとする。だから，葉子のように，天然の旅情を分かち合え，持続的な愛を期待しない女性を求めることになる。まことに都合の良い話に思えるが，しかしそれだけではない。相手にもその自由を認めようとするのである。自分は未練があっても，相手が自分のもとを去ることに耐えなければならない。もっとも，葉子のように，縛り合う関係の気配を感じる少し前に，自

分で去ってくれる相手ならば好都合である。檀にとっての人生である，二人の祝祭の高揚と祭りの後の淋しさ（すぐに一人の祝祭が準備されるが）を感じるための，理想的な相手だろう。

このような，持続的なかかわりにつきものの葛藤を極端に避ける檀の女性とのかかわりの特徴は，二者関係に関する抑うつポジションの理論[9]から理解することができる。我々のかかわりの対象となる女性は，良い対象（母）と悪い対象（母）の両面を持つ。対象と継続的な親しいかかわりを持つためには，対象がこの両面を持つことを受け入れる必要がある。もちろん，相手の中の良い対象の面が優勢である必要があるが。受け入れるためには，相手が良い対象だけではないことへの，失望，悲しみ，怒りなどの感情に直面し，それを乗り越えなければならない。檀はそれを避ける。檀が安心して求める対象は，葉子のように天然の旅情をともにし，放浪の旅の淋しさを祝祭の華やぎに変えてくれる，自分の分身のような相手である。旅が終われば関係も希薄になる。これは，抑うつポジションに達するための困難を減じる働きをする，移行対象[10]として理解される。移行対象は幼児にとってのお気に入りのタオルケットや縫いぐるみのように，母の代理として，子どもの願望や欲求を投影し同一化できる外的対象に起源をもつ。良い母がいないときの淋しさ，不安をいっとき鎮めてくれる。また，自分が望めばいつも自分のそばにおくことができるし，必要がなければ忘れ去ることもできる，都合の良い存在である。自他未分化な一者関係の世界から抑うつポジションの二者関係に発達する中間段階の一・五者関係の世界に移行対象は存在する。縫いぐるみは外的対象だが，子供の願望，欲求の投影の受け手となるところに意味がある。檀にとって葉子は，檀の願望の投影を受けとめられる存在であることに意味があったと思われる。実際の葉子がどういう存在であるかよりも。移行対象は，内なる（心的）現実と外なる現実を関係づけるという，人類にとって永遠の重荷から解放される領域に存在する。それは，遊び，芸術，宗教などの想像的，創造的領域へつながっている。檀の実人生における移行対象との祝祭とそれを浪漫に昇華する創作活動は，ともに彼が現実との直面を避けつつ現実との接触を保ち，自分が解放される世界を創造することを可能にしたと思われる。

入江久恵の男性関係にまつわる檀の被害妄想的不安も，抑うつポジションとからめて理解可能である。久恵が悪い対象の側面ももつかも知れないという葛藤に直面するのが抑うつポジションの課題だが，それに耐え難いときに妄想的分裂的ポジション[11]に退行が生じることがある。悪い対象（右翼の大物）に攻撃される怖さの方が，依存の対象が悪い対象でもあることに直面する怖さよりも，檀にとってはまだ耐えられるということになる。

抑うつポジションは幼児期早期に通過すべきものとされるが，ある時期にこの課題を完璧にクリヤーしてしまうのは難しい。それぞれの年齢において，それぞれの体験において，新たな側面を含む一生の課題と思われる。ただ，幼少期の対象との関係のあり方が，後年の対象との関係の持ち方に反映される。次のBでふれるが，幼いときに母を失った檀の場合は，喪失の痛み……見捨てられて一人になった悲しさ，心の中の良い母がいなくなってしまったことへの虚しさ，怒り……に直面しないための防衛（適応でもある）に，全力を傾けた感がある。その構えが，中年の檀にも持続していると思われる。

B 幼少期の決断との関連

Aにおいて，中年期から晩年にかけての檀の生き方の特徴を二つに分けて捉えた。そしてその特徴を，主として抑うつポジションに関連するテーマと考えられることを示した。抑うつポジションは幼児期早期に原点をもつといわれるので，この点について，幼少期の檀の有りようを見ることにする。

檀少年は，6才の頃から母と離れた生活を断続的に経験し始め，完全に別れたのは9才の時である。昭和35年，48才の時に書かれた『わが青春の秘密』[12] に次の記述がある。

> 私は幼年の日に母方の祖父母の家に放置され，ようやく父母の膝下にひきとられたと思った翌年には今度は母の家出に逢っている。妹達は父方の祖父母の家に預けられ云ってみれば，一家はちりじり，時々思い出したように二番目三番目と後添いの義母がやってきたが，どう云うわけか永く居つかなかった。
>
> と云うことは，結局私が漂泊者であったと同じことになる。私は相手からさしのべられるいかなる愛情も覚えきれず，自分の孤独を鍛治して，その目ざましい歓喜だけをわがものにした。私が登山家にならなかったのは不思議である。後に飲酒を覚えるまで朝晩あてもなく山野を彷徨していたのに，おそらくそれが全生活である者にとっては，山も野も趣味や冒険に近づきにくいのだろう。

幼年期から少年期には，後の飲酒の代わりを，山野の彷徨が果たしていた。それは，檀少年にとって全生活だったという。さらに，31才に書かれた『母の手』[13] に詳しい記述がある。国分（今の久留米）の母方の祖父母に預けられていた，8才の頃のことである。家族を捨てるにあたって，母は一雄に「艱難汝を玉にす」とノートに書き，その意味を教えた。「悲しいと思うことに，負けてはいけませんよ。」と。「私の幼年の日は，母の言葉通り私を試練する美しい道場に満ちていた。」と檀はその教えを守ろうとした。

> 私ははげしく快活になっていった。浮くような軽い足取りで野山を駆けめぐるのである。茨に傷ついてもおそれない——。流れ出る美しい血潮を丁度花のように楽しんだ。時に大きな声で母の名を呼んでみた。けれどももう私は現実の母の名を呼ばないのである。総じて私達が，このよろこばしい生命として生み出されたものの今日の誇りを告げる為に，神々のように誇らかに，母の名を召還した。森の樹々と，水の冷い愛撫のなかに，さびしくよろめきながらも，また蒼空を高く打仰いで，世の人のうちに，果たしてこの私の異常な快活に近寄り得るものがあるであろうか，と思ってみた。

さらに，檀少年は高揚した気持ちで一人駆けめぐりながら，野山の味を噛みしめる。

> 柊の新芽の味がどうであるか。槇の緑葉の苦みがどうであるか。こぶしの実がどうであるか。藤の中皮の味がどうであるか。野あやめが，うつぎが，水仙が，百合が，タんポポがどんな花の味を持っているか——私は幼年の日に金平糖と呼んだキンポウゲのあの黄金の毒の味をさえ知っているのである。私は毒草のすべての乳液の味を知っている。はげしい腹痛の日には，必ずよもぎの葉をむしり喰って，山陰に湧いている泉の傍らへ走っていった。その清水を充分に飲むと，今度は泉の傍らに生えている楓の枝を裂くのである。枝々の幹の中からしたたる楓の液汁がいかに尊く甘いか——それは吐瀉につづく私のどのようにはげしい腹痛をも，いつのまにか快癒させた。

このような山野の彷徨は，その後，足利の長林寺に父と暮らした時もつづけられ，先の

檀の言葉にあるように，青年期に飲酒を覚えるまで，躁的防衛の主な手段になっていた。また，山野の味覚を味わうという口唇期的な対象の取り入れが，彼の虚しさを埋める手だての一つとなり，A（イ）で述べた後年の料理への思いにつながったと思われる。

また，思春期以降の女性への関心の高まりとともに，A（ロ）で述べたように，全体対象としての女性に直面できず，移行対象の世界に活路を見出した。檀一雄の生涯は，幼少年期の対象喪失という外傷体験を乗り越えるための懸命の努力の継続であったように思われる。

檀一雄の自然とのかかわりに注目すると，二者関係に達する困難に焦点を当てる，別の精神分析の理論を持ちだしたくなる。やはり，乳幼児期に原点をおく基底欠損の考えである。バリント[14]によると，心は三つの領域（あるいは水準）に分けられる。エディプス領域，基底欠損領域，創造領域である。エディプス領域では本質的に三者関係における葛藤が問題になる。基底欠損領域は，基本的に二者関係であり，一次愛的調和関係に失調が起こる時が「基底欠損」である。この状態には，オクノフィリアとフィロバティズムの二つの類型がある。オクノフィリアはエディプス複合（三者関係）の基底であり，フィロバティズムは創造領域（一者関係）の基底と考えられる。オクノフィリアは，一次愛的調和関係が破れたときに，いわれなき信頼に基づいて特定の対象にしがみつくことで，安心を得ようとする態度である。相手から抱きかかえられたくて，自分でしがみつくのである。思いこみが強くて，目を開いてきちんとものを見ることをしない人である。依存的という表現に近い。フィロバティズムは，対象関係を信頼できないものと見なし，対象（人間）に依存する事を避け，自然，空間を友好的な広がりとして安心感を持つ。そして，対象のいる世界をコントロールするスキルを磨くことに専念するので，それらから目を逸らさない人である。(男根期)自己愛的と言われるものと重なるところがある。一般に対象とは距離を置くが，「自己の装備となった対象，装備を供給する」対象は愛する。人は，対象へのこの二つの態度を混合して持つと考える。

檀の自然に向かう姿勢，女性という対象への態度は，フィロバティズム的と言えるだろう。バリントのいう二者間の一時的調和関係は，たとえば母子間で一体感を感じている状態がそうである。この調和が破れたときに檀は，オクノフィリア的しがみつきよりもフィロバティズムの態度をとった。そしてそれは，対象の特徴を的確に把握する力を用いて，自分の内的世界を外に表現する，小説家としての創造領域の仕事につながる可能性を開いたといえる。

C　結び

（イ）檀一雄は現実にふれる痛みから距離を置きつづけたのか。

一生檀は逃げ続けたのだろうか。檀が死の四ヶ月前に口述筆記したといわれる，「われ天涯に一人」（『波』昭和 50. 11）でこう述べている。

> 最終章の「キリギリス」では，全ての女と別れて連れ込み宿に一人で長逗留する。ああ，ひとりぼっちだな，俺の夏は終わったんだとびっくりするんだけれども，結果としては一人ぼっちだったことに充足している喜びを書いたつもりです。『火宅の人』とは孤独の喜びを自覚するまでの長い時間の物語と言えるでしょう。逆に言えば，一人

であることの充足感に到るまでに二十年という時間がかかったということになります。(略) 自分でその哀れに充足しなくちゃならない。だから哀しいといえば哀しいが，沸き立つほどの愉快を持越せばどんな辛い状況でも持ち越せる一人一人がいてこそ，みんなの賑わいが出来るんだと思います。そう信じたことをこの小説で表したかった。

「一人であることの充足感」という表現に筆者は期待を持ったのだが，しかし，やはり躁的防衛に頼るということにも読める文章である。もう一つ「キリギリス」を見てみよう。

すると咄嗟に，なーんだ！　オレ，ヒトリボッチ！

私はいぶかしく，自分の身の周りを眺めまわしながら，今更のように孤影悄然の，オノレの情況に気がついた。

そこで大アワテの思い入れになってみたが，いや待て！　今日が日まで，自分のヒトリボッチに対してこんなメザマシイ程の初い初いしさを，感じたことがない

「キリギリス」に書かれているのは50才頃のことだが，語っている（口述筆記）のは，死の可能性も感じていただろう63才の檀である。病床で酒も飲めなかったに違いない。ここでは，ぎりぎりの状況で，一人の哀しみに直面したのではないか。人格の成長に必要な痛みに，この事態では魂の成長にと言った方が良いかもしれない痛みに。

(ロ) 創作者としての檀一雄

檀の人生は，躁的防衛などに頼り，抑うつポジションの課題から逃避したといえるが，それだけで括れるだろうか。大江健三郎のいう[15]，個人的な祝祭ゆえにその死と再生の志が半ばに終わらざるを得なかった，トリックスターとしての檀一雄。水上勉の[16]，「どこに，かような，楽しくて，苦しくて，つらい己れが業苦の生を，はなれて書き得た作家があっただろうか。」という小説家檀一雄の評価。そして三島由紀夫の[17]，「宿命に手助けする代償として，宿命を信じる義務を免れる行き方である。浪漫主義者の生活の理念は，ともするとこの種の免罪符をもっている。」という評。これらは，檀が自分の背負った宿命(境遇と無意識のもつ強い力）のなかで，移行対象の領域に自分の生きる世界を創造し，精一杯自分らしく生きようとしたことを意味している。これを可能にしたのは，Aの「葉子との旅」で見たように，(外的)対象の特徴を捉えて的確に描写する力，内的対象のイメージを外的対象（この場合は移行対象）に上手く重ね合わせて浪漫を構成する力，などの作家としての才能である。そして，檀の防衛に綻びがあったことも大きい。いろいろな防衛でも処理しきれない，淋しさや人恋しさが残ってしまう。檀の移行対象は完璧に思い通りになる縫いぐるみではなかった。処理しきれない思いが，浪漫の造形に向かうエネルギーとなったと思われる。

(ハ) 生活者としての檀一雄

心理臨床家の筆者としては，小説家としての価値だけから，檀という人を見ることは出来ない。アルコール依存により，また女性遍歴，放浪的生活により，家族に多大な心的外傷を与えたとしたら，見逃せない点となる。この点に関して，愛人だった入江久恵[18]，妻ヨソ子，娘のふみ[19]，など檀に関わった人たちの評価は悪いものではない。勝手放題をす

る背景にある，淋しさと人恋しさの側面を感じたからだろう。また，妻子の家，母の家，愛人との二つのアパートの四軒をかかえ，さらに自分の放蕩の費用を稼ぎ出す大変さを，檀は『火宅の人』に書いている。自分を頼る身近な人を養う責任は果たしていた。妻ヨソ子は，『檀』[20] の最後で，「あなたにとって私とは何だったのか。私にとってあなたはすべてであったけれど。」と語っている。

註

1）沖山明徳「檀一雄年譜」（『檀一雄全集別巻』沖積社，1992.），「年譜」（永野秀樹『逢う，花に。』花書院，1999.）を参照。
2）米倉育夫「嗜癖者の病跡学的研究その5—檀一雄」日本病跡学雑誌，17号，1979.
3）福島章「檀一雄」（『愛と生と死』小学館，1980.）
4）永野秀樹『逢う，花に。』花書院，1999.
5）水上勉「解説」（『新潮現代文学21　火宅の人』新潮社，1979.）
6）H.スイーガル（岩崎徹也訳）『メラニー・クライン入門』岩崎学術出版社，1977.
7）大江健三郎「進化と再生への想像力」（『檀一雄全集別巻』沖積社，1992.）
8）檀一雄『わが青春の秘密』新潮社，1976.
9）6に同じ
10）D.W.ウィニコット（北山修監訳）『児童分析から精神分析へ』岩崎学術出版社，1991.
11）6に同じ
12）8に同じ
13）檀一雄「母の手」（4に同じ）
14）M.バリント（中井久夫ほか訳）『スリルと退行』岩崎学術出版社，1991.
15）7に同じ
16）5に同じ
17）三島由紀夫「檀一雄の悲哀」（7に同じ）
18）入江杏子『檀一雄の光と影』文芸春秋，1999.
19）檀ふみ「父檀一雄の手」（7に同じ）
20）沢木耕太郎『檀』新潮社，1996.

文献

檀一雄「火宅の人」（『新潮現代文学21』新潮社，1979.）
高岩とみ『火宅の母の記』新潮社，1978.

A Pathographical Study of Kazuo Dan

Morie Manabe

Kazuo Dan is considered as a ruinous type of writer. He had difficulties in his background, for instance, his mother left home when he was 9 years old. I can see a vitality and will to live behind his dissapation for destruction. It seems like a home environment had a deep effect on his behavior later on. In this paper, I have tried to understand his life through the psychoanalytic viewpoints of Manic Defences, Depressive Position and Transitional Object.